

書名：美術教育と 子どもの知的発達

著者：E.W.アイズナー
訳：仲瀬律久 他

出版社：黎明書房
出版年月：1986年9月
総ページ数：378ページ
ISBN：4654040307



推薦者

山木朝彦
鳴門教育大学大学院教授
芸術系コース（美術）

「現代の美術教育を切り拓いたエリオット・アイズナーの代表作」

著者のエリオット・ウェイン・アイズナー（Elliot Wayne Eisner）は、1933年3月10日、イリノイ州シカゴ市に生まれ、2014年1月10日、カリフォルニア州にある名門スタンフォード大学のキャンパス内の自宅で亡くなった。パーキンソン氏病を患い、その余病に起因する早すぎる逝去だった。

享年80歳といえば、それほど短命というわけでもないのに、「早すぎる」という印象を私が抱いたのは、17冊の専門書に結実するその精力的な研究姿勢を以前から知っていたということもあるが、彼のエネルギッシュな風貌を間近に見る機会があったからである。

1989（平成元）年の第28回大学美術教育学会和歌山大会での講演者として壇上に登ったアイズナーは、まだ56歳の働き盛り。仕立ての良い紺のブレザーに、整った髪、晴朗で聴き取りやすい英語は、全体として押し出しの良い、アクティブな研究者に見えた。事実、彼は国内外の各地で講演を行う行動する研究者として知られており、それを裏付けるように、日本訪問も既に4度目であった。

私がアイズナーの姿を間近に見たのは、それが最初で最後なのだが、その後、年を重ねても、意気揚々としたその講演スタイルが全く変わらなかったことを私たちは現代の便利なメディアであるYouTubeに記録された複数の映像から知ることができる。

さて、肝心の『美術教育と子どもの知的発達』について簡単に紹介しよう。この本の原著名は、**Educating Artistic Vision** である。原著名の意味を汲み、意識すると、「芸術的なものの見方を教育すること」というのが元の書名である。そして、この題目には、児童中心主義と全人的教育観に傾倒した偉大な先人、ローウェンフェルド（Viktor Lowenfeld, 1903-1960）に対する異議申し立ての気持ちが籠められている。

アイズナーは、日常生活を潤滑に営むために必要な「視覚の恒常性」（細部を捨象して捉える傾向）を乗り越え、知覚の分化を促す方法が美術の学習に求められていると本書において述べている。言い換えれば、先入観に捕らわれることなく、対象を観察し、形象や色彩に関する新たな発見を重ねていくことこそが、アートの教育の基本であり、不可欠なプロセスだと主張したのである。

それは、造形的な問題解決や複雑な意味の伝達のために、子どもたちが知的な能力をフルに発揮する学習プロセスとして、美術教育を捉え直す試みであり、「個性が大切」「創造性が重要」と叫ぶばかりのお題目主義に陥っていた当時の美術教育に対する彼の批判意識の表れであった。

アイズナーのアプローチは、多種多様な学説を現実の学習場面に照らして、比較考量するというきわめて学究的なものである。それゆえにこそ言えるのだが、美術教育における理論と実践の有機的な関係性を構築するためには、この著作を精読することから始めるのが最も早道であろう。

